12.4 金 第391回 定期演奏会

堀 朋平(音楽学者・西南学院大学講師)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)
歌劇「魔笛」K.620, 序曲

大志を抱いてウィーンにやってきた25歳のモーツァルト。この年には意欲的なドイツ語オペラ《後宮からの誘拐》が生まれた。ちょうど10年後、亡くなる2か月前に上演された最後のドイツ語オペラが《魔笛》である。魔笛、つまり「魔法の笛」。それは郊外の劇場で人々がやんやの喝采を送って愉しむ、ウィーンではやりの「魔法劇」なのだ。東洋ふうの風景、愉快に踊る動物、鳥人間に、はたまた大蛇を登場させつつ、「夜と昼」の哲学的問い、そして人間の試練と成長を描く壮大なオペラ。それが《魔笛》である。

厳かに響く幕開けの和音は、7年前に入会した秘密の友愛結社「フリーメイソン」の儀式との関連が指摘される。鳥人間パパゲーノの早口を思わせるテーマによる主部のあと(きわめて異例なことに)また冒頭の和音が鳴る。「なんでもござれ」の雑多さと、宗教的な荘厳さが混在したユニークな世界を楽しみたい。編成もこの作曲家にあって最大級のものだ。最新の楽器クラリネットと厳かなトロンボーンに注目。

作曲/1791年　**初演**/同年9月30日、ヴィーデン劇場　**編成**/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部
使用楽譜/ベーレンライター

パウル・ヒンデミット(1895-1963)
交響曲「画家マティス」

モーツァルトのオペラ創作が時の政策に左右されたように、どんな作曲家も社会との妥協やぶつかりを避けることはできない。しかしヒンデミットほど茨(いばら)の道を歩んだ人も少ないだろう。

1933年1月30日、ドイツではヒトラーが首相に就任し、ナチスが政権与党となる。「民族共同体」にそぐわぬと判断された芸術は「退廃的」と呼ばれて葬られる――そんな時代が始まったのだ。ヒンデミットはその6年前からベルリン音楽大学で教鞭をとり、作曲・演奏活動も高く評価されていた。ところがオペラ《その日のニュース》の入浴シーンがヒトラーの逆鱗に触れた1929年頃から雲行きが変わり、本作は初演の大成功にもかかわらず「上演禁止」を命じられてしまう。この大事件をきっかけにヒンデミットは祖国を追われ、トルコやアメリカに新天地を求めるようになる。

交響曲《画家マティス》は、みずからの脚本による同名オペラから生まれた。舞台は16世紀の農民戦争。農民とともに貴族に盾つく画家の話だから、政権に睨まれたのも当然といえば当然である。マティスとはマティアス・グリューネヴァルト(1470年頃～1528年)のこと。当時にあって死や痛みの表現が突出している画家だ。何層にもおよぶ大作「イーゼンハイムの祭壇画」が作曲にインスピレーションを与えた。各楽章には、着想源となった絵を示唆するタイトルが付けられている。

第1楽章は「天使の奏楽」(図)。弦楽の分奏による純粋な三和音――ヒンデミットにはきわめて稀な現象だ――が天の霊気をふりまくと、「三人の天使が歌う」と記された中世のメロディをトロンボーンが奏する。

第2楽章の「埋葬」はおそらく、祭壇画の最下部に収められた「キリストの埋葬」を指す。葬送行進曲のような音調は、協和と不協和のあいだを広くゆれうごく。理論家としても名高いヒンデミットが「和声的な振動(fluctuation)」と呼んだ特有の技法である。

図:グリューネヴァルト「天使の奏楽」(wiki commonsより)

第3楽章「聖アントニヌスの誘惑」は、修行中の聖人をおそう怪物の幻想。蛇がのたうつような冒頭テーマが耳に残る。これに合わせるように、テンポは「拍どおりに」、「拍から自由に」、「幅をもたせて」と大きく揺れる。終わりが予感されるのは、フガートを畳みかける開始9分あたり。やがて金管がグレゴリオ聖歌「シオンよ、救い主を讃えよ」(楽譜に明記されている)を奏でると、ラストは「アレルヤ」の大合奏で高らかに閉じられる。

作曲／1933〜34年　**初演**／1934年3月12日、W. フルトヴェングラー指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団　**編成**／フルート2(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、バスドラム、スネアドラム、グロッケンシュピール、トライアングル、シンバル、弦5部
使用楽譜／ショット・ミュージック

ロベルト・シューマン(1810-1856)
交響曲 第2番 ハ長調 作品61

ヒンデミットの半世紀前も、音楽家にとっては受難の時代だった。ベートーヴェンの出現によって音楽史は、容易に先に進めないフェイズに入る。まさにこの時期、いわゆる「ロマン派第2世代」を生きたR. シューマンは、「できること」と「すべきこと」の摩擦にたえず切り裂かれていた。

そんな作曲家にとって憧れの的こそ、思うさまにペンを走らせることのできた「ロマン派第1世代」のシューベルト(1797〜1828)である。この先輩がのこした《大ハ長調交響曲》(1839年初演)に励まされた後輩は、そのテーマをなぞることで渾身の《第1交響曲》を世に出し、みずからの「春」を宣言したのである。ちょうど30歳のころだ。

以後もシューマンにとって交響曲は最大の目標であり、全身全霊を傾けるべきジャンルだったが、ベートーヴェンのように9つも書けないことをたぶん知っていただろう。その年シューマンは、長らくの拠点だったライプツィヒを去ってドレスデンに活路を求めた。10年後に死をもたらす精神の病(幻聴)も兆しを見せていた。そんな転機にあって着手された第2作は、芸術家の生涯を賭したような切迫した作品に仕上がっている。もう書き納めとでもいうように(あと2作が書かれることになるのだが)。なにより♯と♭がひとつも付かない「ハ長調」で交響曲を書く決意はたいへんなものだ。なにしろそれはモーツァルトとシューベルトの最後を飾った交響曲の調なのだから。

第1楽章　冒頭は、ハイドン最後のシンフォニー(第104番)の序奏をなぞるように幕を開け、やがて主部に流れ込む。その晴れやかな音調の裏には、半音階のモティーフがしばしば旋回をみせる。ここに病的なメランコリーを聴くのも、けっして深読みではない。

第2楽章　「スケルツォ」(おどけるように)と記され、躁的な渦巻きがつづく。2つの中間部をはさんだ5部形式は、ベートーヴェンからの伝統。

第3楽章　ロマン派の「アダージョ」は心の内奥への旅だ。時間が止まった別世界で瞑想に浸るこの楽章に全体の焦点がある。中ほど、管楽器に高音のヴァイオリンがトリルで熱烈に寄り添うところなどは、のちにチャイコフスキーをうならせた。

第4楽章　シューベルトは《大ハ長調交響曲》終楽章の第2主題で、ベートーヴェンの「歓喜の歌」をなぞった。シューマンは同じ箇所で、この偉人の歌曲《遥かなる恋人によせて》のテーマを変形して登場させる(開始4分ほど)。そうしておいて、後にこれをオリジナルの形で聴かせるのだ。その歌詞には私たちへのメッセージも込められている——「この歌を受けよ」と。

作曲／1845年末-1846年10月　**初演**／1846年11月5日、メンデルスゾーン指揮、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団　**編成**／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部
使用楽譜／ブライトコプフ&ヘルテル

※編成は使用楽譜に基づくもので演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。